

南部九州における弥生時代瀬戸内系土器の基礎的研究

河野 裕次

**The fundamental study of Setouchi pottery of Yayoi period,
in South-Kyusyu.**

Yuji KAWANO

Abstract

In this paper, I have examined the relationship between southern Kyushu and Setouchi in the Yayoi period by referring to Setouchi pottery and cultural elements from southern Kyushu. In the first period (about BC.3-BC.1), there was contact between southern Kyushu and western Setouchi, and it is assumed that this was part of the increasing interaction over a large area of Western Japan at this time. In the second period (about AD.1-AD.2), cultural elements from southern Kyushu cannot be confirmed in Setouchi, and so the existence of the contact becomes unclear. Setouchi pottery produced in this period showed influences of the area's relationship with eastern Kyushu. In the third period (about AD.2-AD.3), pottery movement from Setouchi to Kyushu declined, and the number of excavations of Setouchi pottery decreases. However, it is in this period that the amount of Setouchi pottery excavated from the tomb areas increases.

Thus, the movement of pottery and the influence of the pottery attributes were confirmed to be one direction from Setouchi to southern Kyushu through each period. Such an asymmetric relationship will become an important aspect when thinking about the background of the relationship between southern Kyushu and Setouchi in the future.

キーワード：弥生時代，南部九州，瀬戸内系土器，地域間関係

1. 本稿の目的

弥生時代後半期の南部九州（宮崎県・鹿児島県）¹では，日向・大隅の海岸部を中心として，瀬戸内地方に系譜をたどれる土器や方形石包丁が流入してくることが古くから知られている。こうした瀬戸内系文化要素は，南海産貝輪交易ルートとの関わりや，鉄器の流通との関連が指摘される等，多くの研究者の注目を集めてきた。また近年，瀬戸内でも土器を中心とした南部

¹ 本稿における地域設定は以下の通りである。南部九州→現在の鹿児島県と宮崎県。瀬戸内→現在の四国全県（愛媛県・香川県・徳島県・高知県）と，本州の瀬戸内海沿岸（山口県・広島県・岡山県・兵庫県・大阪府）。なお，それぞれを旧国単位（日向・大隅・薩摩等）で呼称する。

九州系文化要素の出土が確認され始めている。このような状況から、これまで指摘されてきた南部九州への瀬戸内系文化要素の流入は決して一方的なものではなく、南部九州と瀬戸内間における何らかの交流や社会的関係の一端を表すものであると推測される。本稿では、こうした南部九州と瀬戸内との地域間関係を考えるための基礎作業として、瀬戸内系土器²の動態と、瀬戸内における南部九州系文化要素の両方を検討し、その様相が時間的・空間的にどのように展開していくかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の現状と問題点

南部九州における瀬戸内文化の影響について、最初に注目したのは森貞次郎である（森1966）。その後多くの研究者によって瀬戸内系土器に関する論考が発表されてきたが、ここでは本稿と直接に関わるものを取り上げて、研究の現状と問題点を示したい。

石川悦雄は、宮崎県に中期後半から後期中葉にかけて瀬戸内系土器の流入がみられ、在土器様式に高坏が出現したのはこの時期の瀬戸内系高坏の流入によるものと想定している。また、このような中期後半に始まる瀬戸内系土器の伝播に対する何らかの反応の現われとして、花卉状間仕切住居が発生する後期初頭の時期を瀬戸内・畿内系文化伝播の第1段階、瀬戸内系土器に代わって畿内系土器や線刻絵画文・記号文が流入する後期後葉～終末期を第2段階として設定し、これらの東方文化の伝播が「南九州のある種まとまりのある社会 - これを“熊襲・隼人”とすることも可能 - の解体を促進したことは疑いえない」（石川1983, p.118）と述べている。

池畑耕一は、土器だけではなく宮崎県で出土する両端に抉りを持つ、もしくは抉りを持たず円孔を持つ石包丁が瀬戸内でみられる石包丁の形態と類似していることに着目し、石包丁形態の類似から、「弥生時代中期末から後期初頭にかけて瀬戸内地方と宮崎県とのつながりが非常に強かったことを物語っている」（池畑1976, p.5）と述べ、両地域の関係の深さを指摘している。

また、その後池畑は畿内第 様式期（中期後半）の瀬戸内と南部九州との関係について考察を行い、遺物の流れが瀬戸内から南部九州への一方通行的なものであることから、『魏書』や『後漢書』にみられるいわゆる「倭国大乱」がこの時期に発生し、瀬戸内における戦乱から逃れるために人々が南九州に逃亡してきたという仮説を提示した。また、南九州における掘立柱建物についてもその時期が中期後半に限られることから、逃亡してきた人々が建造したものであると述べている（池畑1992）。

梅木謙一は、南部九州における中期後半～後期前半の瀬戸内系土器を、胎土の特徴と形態から土器 A（搬入土器）、土器 B（模倣土器）、土器 C（折衷土器）に分類し、それぞれの属性や器種についての検討を行った（梅木2004）。その結果、中期後葉～後期初頭には搬入が主体で、後期前葉～中葉になると模倣が主体となることを明らかにし、前者を搬入期、後者を模倣期としている。さらに、瀬戸内系土器が半数以上の搬入土器と地元製作品からなり、搬入土器では伊予からの搬入が主体で、中部瀬戸内の備讃地域がそれに続くこと、瀬戸内では少ない赤色塗

2 本稿では、瀬戸内在地の土器に形態や属性の系譜を求めることができる土器を「瀬戸内系土器」と呼称する。

彩された土器が存在し、祭祀性が想定されることを明らかにした。さらに模倣土器では、伊予系高坏の搬入とその祭祀性の影響から、ミニチュア高坏（第4図 No.51・宮崎県教育委員会1988）のような器種が新たに生み出されていると述べている。また、瀬戸内にみられる南部九州系文化要素についても触れ、南部九州にみられる瀬戸内系文化要素とはその質と量ともに明らかな違いが認められることから、交流内容が等質ではなかったものと想定している。

これを受けて下條信行も、甕のような「土着的土器」（下條2004，p.235）が移動していることから、南部九州と瀬戸内間における交流が「高坏，壺がもつ祭祀などの観念的所為に供するに留まらず，生活次元にまで下りた移動であった可能性を考えねばならないようになった」（下條2004，p.235）と述べている。さらには、日向で成立した花卉状間仕切住居の系統の竪穴住居が伊予の四国中央市小富士遺跡（愛媛県埋蔵文化財調査センター1991）³等で見られることから、これを南部九州から伊予へともたらされた文化要素であると考え、伊予と日向が凹線文期（中期後半）には生活次元において相互交流を行っていたと結論付けている。また下條は、豊後でこの時期の凹線文土器がほとんど存在しないことや、宮崎県新富町鬼付女西遺跡B地区1号住居からは伊予南部で製作された可能性が高い西南四国系甕と伊予系の壺が出土しており（宮崎県教育委員会1989）、伊予南部においても伊予系の凹線文土器が少なからずみられることから、豊後経由ではなく伊予 伊予南部 日向という交流ルートの存在を想定している。

西谷彰は、九州における瀬戸内系土器（搬入土器）の動態を、都出比呂志の土器移動の4類型（都出1989）に当てはめて検討を行った（西谷2005）。それによれば、東南部九州への土器の移動は壺と高坏を中心とする（都出のA類型）ことから、主に交換・交易によるものと捉え、一時的な滞在目的による人の移動が大半であったと推測している。さらに、中期後半に西部瀬戸内系土器の出土が顕著な東南部九州と、後期前半に東部瀬戸内系土器の出土が顕著な北部九州という大きな2つのまとまりを見出すことができることを明らかにし、前者では南海産貝輪交易を目的とした交易ルートの開拓、後者では主として大陸系文物の入手を目的とした北部九州社会との交流であったという推論を述べている。

田崎博之は、弥生時代の土器生産体制について考察する中で、南部九州で出土する瀬戸内系土器についても言及している（田崎2004）。田崎は、南部九州で出土する瀬戸内系土器の中に、焼成剥離を起こしたもの（宮崎市阿波岐原採集の壺，鹿屋市前畑遺跡出土の高坏）が存在することを指摘し、それらが搬入土器ではなく、西部瀬戸内から粘土を入手して忠実に模倣して製作された土器であると述べ、その背景に土器作り工人の移動を想定している。

中里伸明は、熊本県下でみられる伊予系の瀬戸内系土器について、南部九州経由で持ち込まれた可能性が高いことを指摘している（中里2009）。さらに、九州における瀬戸内系土器分布圏の西限である薩摩半島西岸と、鑄造鉄器等で代表される九州西岸流通圏の南限が重複している（第1図）ことから、瀬戸内で自産できない鉄素材の獲得がこうした瀬戸内系土器の動向の背景にあると想定している。しかし、現時点では熊本県や鹿児島県においてこの時期の鍛冶の

3 小富士遺跡の住居址は、主柱穴が住居内に方形に4ヶ所配置されている等、南部九州における典型的な花卉状間仕切住居とは形態的にやや異なる。小富士遺跡では南部九州系土器が出土していないため、これらの住居形態が南部九州の影響を受けているかどうかについては再検討する必要があると考える。従って本稿では、これを南部九州系の花卉状間仕切住居としては取り扱わないこととする。

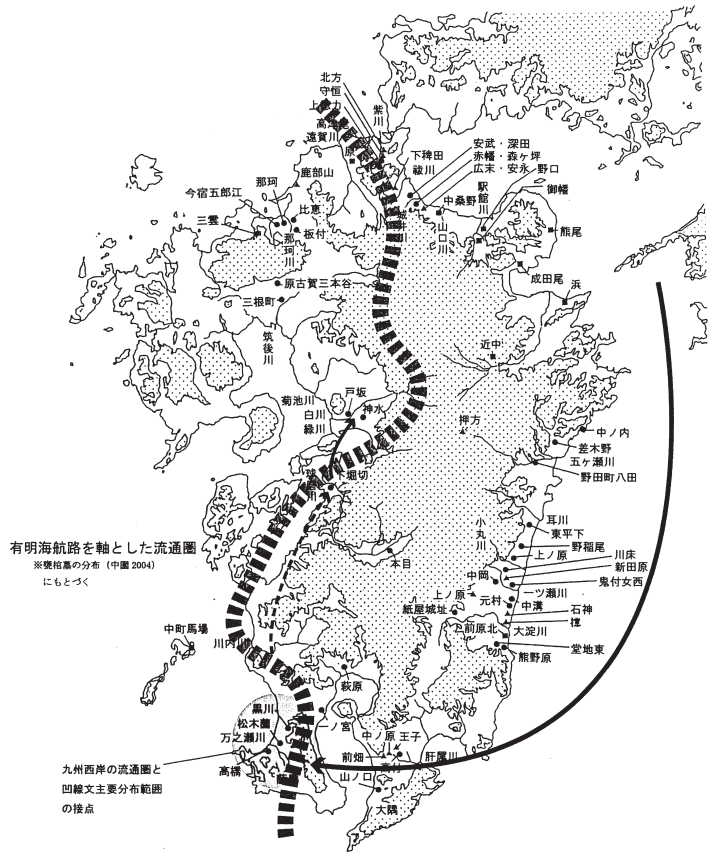
痕跡は不明瞭であり、今後の課題として鉄素材が九州西岸で流通していたこと、また瀬戸内出土資料の中から九州西岸の出土資料との共通項を何らかの形で見出す必要があると述べている。

このように、南部九州における瀬戸内系土器については、中期後半期に流入が活発であること、土器の移動が瀬戸内から南部九州へ一方向的であること（中期後半～後期中葉）、土器以外にも石包丁のような遺物の類似性が認められることが明らかとなっている。さらに、こうした瀬戸内系土器流入の背景としては、「倭国大乱」や、南海産貝輪交易ルートとの関わり、鉄器の流通との関わりといったものが想定されている。また、田崎のように土器作り工人の移動を想定する意見もある。

しかし、瀬戸内系土器流入の背景に関して提示された見解は、必ずしも考古学資料から明確に立証されているわけではないことに注意が必要である。特に南海産貝輪や鉄器については、南部九州における様相自体がまだまだ不明瞭であり、現状ではこれら特定の物資と瀬戸内系土器の流入とを結びつけて考えることには慎重にならなければならないと考える。

以上、研究の現状を概観してきたが、いくつかの問題点が指摘される。まず、これまで行われてきた検討は中期後半期の搬入土器を中心として進められており、後期に多くみられる模倣土器や折衷土器を含めた網羅的な検討は、梅木の論考（梅木2004）以外にはほとんどなされていない。また、後期後半期にみられる瀬戸内系土器についても詳細に検討されておらず、瀬戸内系土器の全体的な様相が、中期後半～後期末葉にかけて時間的にどのように変異していくかが不明瞭である。また、瀬戸内で出土する南部九州系文物についても、事例は少ないが、それらの時間的・空間的な様相を整理し、瀬戸内系土器の動態との関連性を検討する必要があるだろう。

そこで本稿では、中期後半～後期末葉にみられる瀬戸内系土器について、搬入土器だけでなく、模倣土器や折衷土器についても網羅的に取り上げて検討を行う。また、瀬戸内で出土する南部九州系文化要素についても検討を行い、両地域間にみられる関係の具体的な様相が、時間

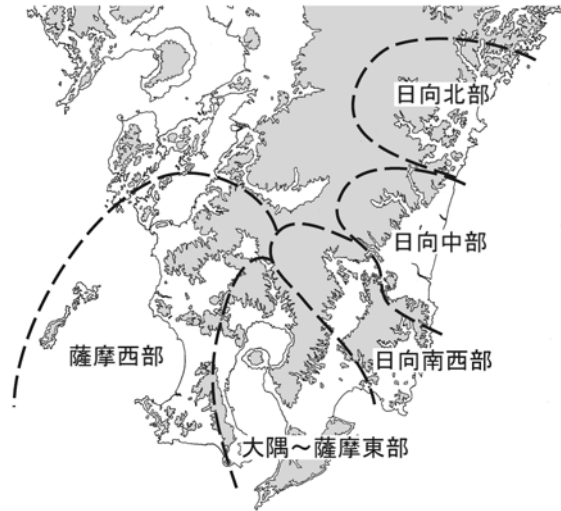


第1図 九州西岸の流通圏と瀬戸内系土器の動態（中里2009）

的にどのように変異していくのかを明らかにしたい。

3. 資料と検討方法

弥生時代の南部九州出土の瀬戸内系土器を中心として、瀬戸内出土の南部九州系土器、竪穴住居址を検討資料とする。まず、瀬戸内系土器について胎土と形態的な特徴から分類を行う。さらに、分類した類型、器種、出土状況、分布の変異を小地域毎（第2図）⁴に時間軸に沿って検討し、各時期における瀬戸内系土器の特徴を抽出する。また、瀬戸内出土の南部九州系土器、竪穴住居址についても検討し、時期、分布、出土状況等について整理を行う。それらの検討の後、他の文化要素の動態とも照らし合わせながら、各時期における瀬戸内と南部九州との地域間関係について考察を行う。



第2図 地域区分模式図

なお、これらの検討の前提となる土器編年と併行関係については、本来ならば再検討する必要があると考えるが、紙幅の関係もあるため詳細な検討は別稿に譲りたい。本稿では、これまでの土器編年研究（梅木1995・2004，栗畑2000，菅原・梅木2000，田崎1998，坪根1996・2004，中園1997，中村1987，本田1980，松永2004他）を基に、筆者の見解を加え整理したものをを用いることとする（第1表）。

4. 検討結果

4-1. 南部九州における瀬戸内系土器

瀬戸内系土器を以下の基準で集成・分類を行った（第2表）。集成は、報告書や文献で図化・公表されているものを対象としているが、南さつま市松木藺遺跡出土の土器（表 No.333～335）については、今回筆者が図化を行った（第3図）⁵。分類は梅木の分類案（梅木2004）を参考にして、筆者の観察と梅木の集成を基に行っている。

胎土

類…南部九州の胎土と異なるもので、瀬戸内の胎土のもの⁶

4 地域区分は、地理的な基準と土器様式圏の動態を踏まえ、日向北部、日向中部、日向南西部、大隅～薩摩東部、薩摩西部という5つの小地域に区分する。

5 調査者である本田道輝氏に掲載の許可をいただいた。

6 土器胎土は小地域毎に多様であり、それらをここで詳細に記述することは紙幅の関係もあり困難である。ここでは、南部九州在土器の胎土とは異なるもので、筆者の実見や報告書の記載により、瀬戸内在地の土器胎土と同類または極めて類似していると判断したものを類とした。

第1表 土器編年と併行関係(案)

	薩摩西部	薩摩東部～大隅	日向	瀬戸内
中期初頭	入来式・黒髪式	入来Ⅰ式	入来Ⅰ式・豊後中期1期	Ⅱ様式
中期前葉		入来Ⅱ式	入来Ⅱ式・豊後中期2期	Ⅲ様式
中期中葉	山ノ口Ⅰ式・黒髪式	山ノ口Ⅰ式	山ノ口Ⅰ式・豊後中期2～3期	Ⅳ様式
中期後葉	黒髪Ⅱb式	山ノ口Ⅱ式	中溝Ⅰ式	
中期末葉			中溝Ⅱ式	
後期初頭	松木菌式	高付式	中溝Ⅲ式	Ⅴ様式
後期前葉			下那珂式1期	
後期中葉			下那珂式2期	
後期後葉			熊野原B式1期	
後期末葉	中津野式		熊野原B式2期	庄内式併行
			大戸ノロ式1期	
古墳初頭	東原式		熊野原C式1期	布留式併行

注:表の縦の長さは必ずしも時間の長さを表わしていない。

参考:梅木1995・2004, 柴畑2000, 菅原・梅木2000, 田崎1998, 坪根1996・2004, 中園1997, 中村1987, 西谷2002, 平2004, 本田1980, 松永2004

類...南部九州の胎土と同様のもの

類...判断できないもの

形態

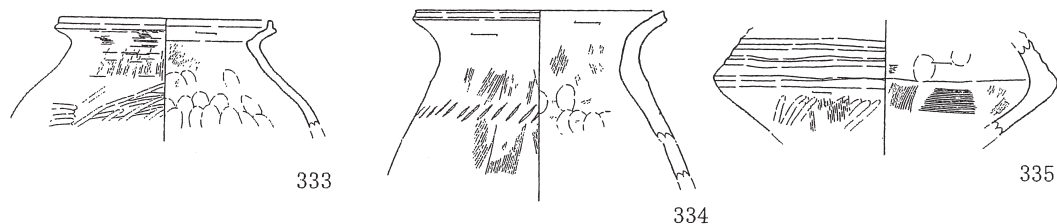
A類...瀬戸内の器形, 施文を持つもの

B類...南部九州在地の器形に瀬戸内の属性が組み合わさったもの

C類...判断できないもの

以上の基準の組み合わせのうち, A類を搬入土器, A類を模倣土器, B類を折衷土器とする(第4図)。南部九州で出土する瀬戸内系土器は109遺跡335点を数える。類型別にみると, 折衷土器が121点と最も多く, 搬入土器が118点, 模倣土器が69点, その他が27点となる(第5図)。搬入土器の起源地については, 梅木の集成(梅木2004)の中で詳細な比定が行われている他, 各報告書中で起源地が明らかにされているものも存在する。本稿ではそれらのデータと, 筆者の観察を基に起源地を推定している。

搬入土器の起源地を推定できたのは62点である。内訳は, 伊予を中心とした西部瀬戸内が45



第3図 南さつま市松木菌遺跡大溝出土瀬戸内系土器(筆者実測・S=1/4・番号は第2表と対応)

第2表 瀬戸内系土器集成表 (番号は地図と対応)

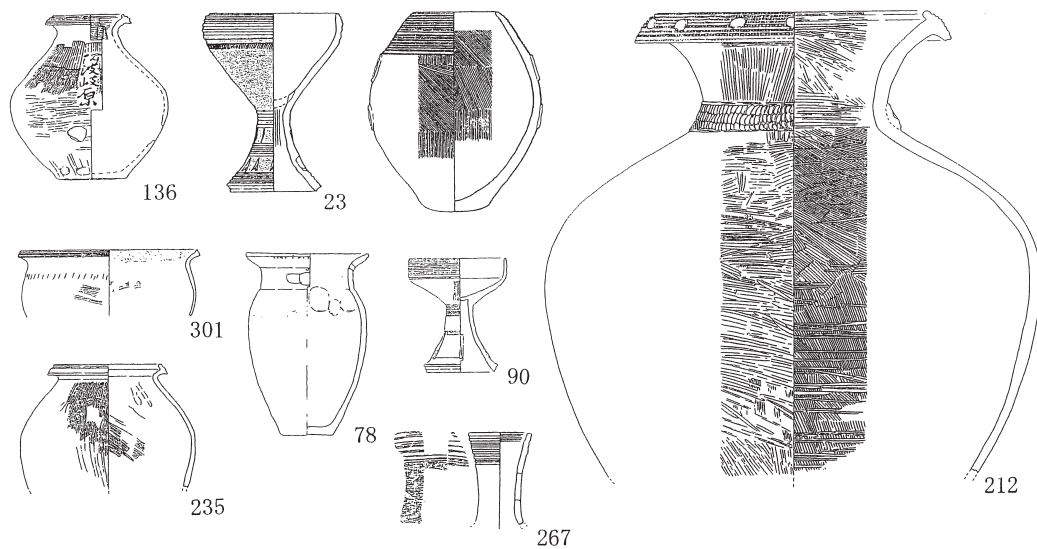
地図	遺跡名	地域	遺構	状態	No.	器種	通存度	分類	時期	共存遺物	備考	文献						
1	五ヶ村遺跡	高千穂町	包含層	覆土	1	高坏	裾部	吉備・讃岐 A	中期後~末葉	陶器	網線による格子・横注文と凹線	宮崎県考古文化財センター2003b						
			包含層		2	無頸壺	瀬戸内 A	中期後~後期初頭?	1期									
			包含層		3	高坏	瀬戸内 A	中期後~後期初頭?	1期									
			4号竪穴住居		4	高坏	瀬戸内 A	中期未~後期初頭	1期									
			包含層		5	甕?	日向 B	後期前葉以降?	2期									
			包含層		6	甕?	日向 B	後期前葉以降?	2期									
			包含層		7	甕?	日向 A	後期前葉以降?	2期									
			包含層		8	把手付水注	日向 A	後期前葉	2期									
			包含層		9	壺	伊予 A	中期末葉	1期									
			包含層		10	壺	伊予 A	後期前葉	2期									
2	古城遺跡	高千穂町	包含層	覆土上~中層	11	壺	口縁部	伊予 A	後期前葉	2期	東部瀬戸内系	高千穂町教育委員会2000						
			包含層		12	壺	口縁部	伊予 A	後期前葉	2期								
			包含層		13	壺	口縁部	瀬戸内 A	中期後~末葉	1期								
			4号竪穴		14	壺	瀬戸内 A	中期未~後期初頭	1期									
			1号竪穴		15	壺	瀬戸内 A	中期未~後期初頭	1期									
			採集		16	壺	日向 A	中期未~後期初頭	1期									
			採集		17	高坏	日向 A	中期未~後期初頭	1期									
			包含層		18	壺	日向 A	後期後~末葉	3期									
			包含層		19	甕	日向 B	後期前葉	2期									
			包含層		20	甕	日向 B	後期前葉	2期									
3	三須遺跡	延岡市	採集	包含層	21	壺	胴部	日向 C	後期前葉?	2期	伊予系	田中 茂1989						
			採集		22	壺	胴部	日向 C	後期前葉?	2期								
			採集		23	高坏	伊予 A	後期前葉?	1期									
			採集		24	無頸壺	東部瀬戸内 A	中期後~末葉	1期									
			SA15		25	高坏	裾部	日向 A	後期前葉	2期								
			SA23		26	器台?	柱部	日向 C	後期前葉	2期								
			SA31		27	壺	口縁部	伊予 A	中期末葉	1期								
					28	壺	胴部	日向 C	後期後葉	3期								
					29	甕	口縁部	日向 A	中期未~後期初頭	1期								
					30	壺	口縁部	日向 B	後期?	2期								
4	鶴野内中下流遺跡	白河市	包含層	包含層	31	壺	類部	伊予 A	中期未~後期初頭	1期	伊予系	宮崎県考古文化財センター1989a						
					32	壺	口縁部	日向 A	後期前葉?	2期								
					33	高坏	脚部	日向 C	後期初頭?	2期								
					34	器台	柱部	日向 B	後期?	2期								
					35	高坏	裾部	日向 C	後期?	2期								
					36	器台	受部	日向 B	後期後葉	3期								
					37	高坏	裾部	伊予 A	中期末葉	1期								
					38	甕	完形	日向 A	後期後葉	3期								
					39	壺	口縁部	日向 B	後期後葉	3期								
					40	高坏	完形	日向 A?	後期後葉	3期								
5	赤坂遺跡	川南町	包含層	周溝内	41	高坏	完形	日向 A?	後期後葉	3期	吉備系	宮崎県教育委員会1986						
			包含層		42	長頸壺?	口縁部	日向 A?	後期後葉	3期								
			包含層		43	器台	頸部	日向 A	後期末葉	3期								
			包含層		44	器台	受部	日向 A	後期末葉	3期								
			1号周溝遺構		45	口縁部	瀬戸内 A	後期前葉	1期									
			SM1		46	完形	日向 A?	中期末葉	1期									
			SA9		47	長頸壺	完形	日向 A?	後期後~末葉	3期								
			SA11		48	高坏	口縁部	日向 B	後期後~末葉	3期								
			SA13		49	壺	胴部	日向 A?	後期後~末葉	3期								
			SA1		50	器台	完形	日向 B	後期後葉	3期								
6	西峰原遺跡	川南町	溝状遺構1	包含層	51	三二子ユエ高坏	完形	日向 A	後期初~中葉	2期	吉備系	宮崎県考古文化財センター2007c						
			溝状遺構1		52	器台	完形	日向 A	後期後葉	3期								
			C-116号溝遺構		53	甕	胴部	日向 A	後期後葉	3期								
			新蓋町		54	壺	口縁部	日向 A	中期後~末葉	1期								
			新蓋町		55	壺	口縁部	日向 A	中期後~末葉	1期								
			新蓋町		56	壺	口縁部	瀬戸内 A	中期後~末葉	1期								
			7		西峰原遺跡	新蓋町	包含層	包含層	57	壺			口縁部	日向 A	中期後~末葉	1期	吉備系	宮崎県考古文化財センター2007a
							包含層		58	壺			口縁部	日向 A	中期後~末葉	1期		
							包含層		59	壺			口縁部	日向 A	中期後~末葉	1期		
							包含層		60	壺			口縁部	日向 A	中期後~末葉	1期		
包含層	61	壺		口縁部			日向 A		中期後~末葉	1期								
包含層	62	壺		口縁部			日向 A		中期後~末葉	1期								
包含層	63	壺		口縁部			日向 A		中期後~末葉	1期								
包含層	64	壺		口縁部			日向 A		中期後~末葉	1期								
包含層	65	壺		口縁部			日向 A		中期後~末葉	1期								
包含層	66	壺		口縁部			日向 A		中期後~末葉	1期								

南部九州における弥生時代瀬戸内系土器の基礎的研究

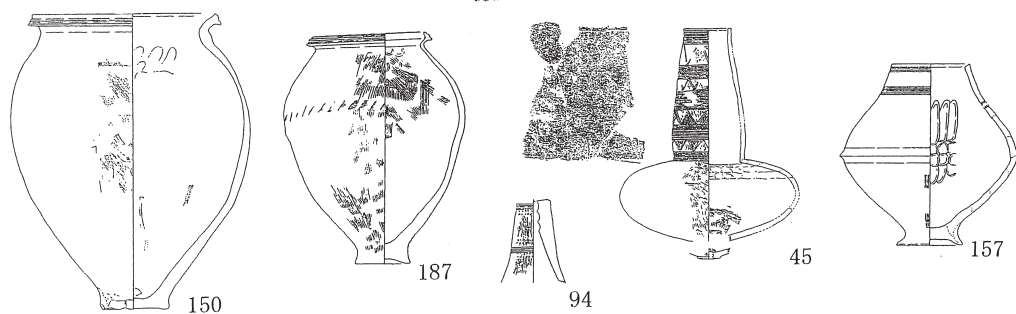
31	下期河遺跡	宮崎市	宮崎県埋蔵文化財センター2004b	B区包含層	110	高坏	坏部	瀬戸内 A?	中期末～後期初頭	1期	甕、壺、高坏、鉢、敲石		宮崎県埋蔵文化財センター2004a
				SA103	111	壺	口縁部	瀬戸内 A?	後期後葉	3期			
				SA104	112	高坏	脚部	日向 B?	後期後葉	3期			
				SA105	113	壺	口縁部	日向 A?	後期後葉	3期	二重口縁に凹縁		
				SA106	114	甕?	口縁部	日向 A?	後期後葉	3期	甕、台付鉢、鉢、打製石器、石包丁		
				SA107	115	器台	柱部	日向 B	後期前～後葉	2期	甕、鉢、臺、打製石	備前瀬戸地方に類例	
				SA114	116	壺	口縁部	日向 B	後期前～中葉	2期	黒草台付高坏、砥石、磨製石、石包丁	口縁端部に凹縁	
				D区包含層	117	壺	口縁部	日向 B	後期前葉	2期		口唇部隆状文、東部瀬戸内系	
					118	壺	口縁部	日向 B	後期前～中葉	2期		東部瀬戸内系?	
					119	高坏	坏部	日向 A?	後期前～後葉	2期			
					120	壺	口縁部	日向 B	後期前～中葉	2期	甕、壺、鉢、碇石、磨製石、鐵		
					121	壺	口縁部	日向 B	後期前～中葉	3期	甕、壺、鉢	混入?	
					122	壺	口縁部	日向 B	後期末～古墳初頭	3期	甕、壺、鉢	二重口縁に凹縁	
				F区包含層	123	壺	口縁部	日向 B	後期後葉	3期			
124	壺	口縁部	日向 B		後期中葉	2期							
125	壺	胴部	瀬戸内 A?		後期初～前葉	2期							
126	壺	完形	日向 B		後期前葉	2期	甕、壺、高坏、鉢、臺	記号文化					
127	壺	完形	日向 B		後期前葉	2期							
128	甕	口縁～胴部	日向 B		後期前葉	2期							
32	下期河貝塚	宮崎市	宮崎県総合博物館1988	包含層	129	甕	口縁～胴部	日向 B	後期初～前葉	2期			宮崎県埋蔵文化財センター2001a
				130	甕	口縁～胴部	日向 B	後期前葉	2期				
				131	壺	口縁部	日向 B	後期前～中葉	2期		口縁部に凹縁		
				132	壺	口縁部	日向 B	後期前～中葉	2期		伊予東部 様式?		
				133	壺	口縁部	東部瀬戸内 A	後期前～中葉	1期				
				134	把手付水注	口縁～胴部	東部瀬戸内 A	中期末葉	1期				
				135	高坏	完形	伊予 A	中期後～末葉	1期		焼成時破裂、焼成後穿孔		
				136	甕	完形	伊予 A	中期後～末葉	1期				
				137	甕	口縁、底部	日向 A	後期前葉	2期	甕、壺、高坏	東部瀬戸内系		
				138	高坏	脚部	伊予 C	中期後～末葉	1期				
38	町屋敷遺跡	宮崎市	宮崎県埋蔵文化財センター2001a	B区 SE(溝1)	139	甕	口縁部	日向 C	後期?	2期			宮崎県埋蔵文化財センター2001a
				140	壺	口縁部	日向 B	後期?	2期				
				141	甕	口縁部	日向 B	後期?	2期				
				142	甕	口縁部	讃岐 A	後期初～前葉	2期				
				143	器台	柱部	日向 B	後期中葉	2期				
				144	長頸壺	完形	日向 B	後期中葉	2期		東部瀬戸内系?		
				145	長頸壺	口縁～胴部	日向 B	後期中葉?	2期		東部瀬戸内系?		
				146	壺	口縁部	伊予 A	後期初～前葉	2期				
				147	甕	口縁部	日向 B	後期中葉	2期				
				148	器台	完形	日向 B	後期中葉	2期				
				149	器台	完形	日向 B	後期中葉	2期				
				150	甕	完形	日向 B	後期初～前葉	2期				
				151	器台	柱部	日向 B	後期中葉	2期				
				152	環濼9a	口縁～胴部	日向 B	後期初頭	2期	大甕、壺、鉢			
39	下郷遺跡	宮崎市	宮崎市教育委員会1989	環濼9a	153	甕	口縁～胴部	日向 B	後期中～後葉	2期			宮崎市教育委員会1989
				環濼9b	154	器台	壺～柱部	日向 B	後期中～後葉	2期	大甕、器台、壺		
				環濼9c	155	甕	口縁～胴部	日向 B	後期中葉	2期	長頸壺、台付鉢		
				環濼9d	156	甕	口縁～胴部	日向 B	後期中葉	2期	甕		
				環濼9e	157	脚台付壺	完形	日向 A	中期?		方形住居		
				環濼9f	158	甕	完形	日向 B	中期?		須田木遺跡例と同瀬戸内系		
40	穂遺跡	宮崎市	宮崎県総合博物館1982	不明	159	器台	柱～裾部	A	後期初～中葉	2期			宮崎県総合博物館1982
				不明	160	高坏	脚部	中国山境、山境 A	中期後～末葉	1期	東部瀬戸内系?		
				採集	161	高坏	裾部	伊予 A	中期後～末葉	1期	山形透かし		
				採集	162	壺	口縁部	日向 A	後期初頭?	2期			
41	宮崎市護国神社	宮崎市	宮崎市教育委員会2003	不明	163	甕	完形	伊予 A	中期中葉	1期			宮崎市教育委員会2003
				不明	164	甕	口縁部	瀬戸内 A	中期中葉	1期	伊予系		
				不明	165	甕	口縁部	瀬戸内 A	中期中葉	1期	伊予 様式?		
				不明	166	甕	口縁部	瀬戸内 A	中期中葉	1期	伊予 様式?		
42	宮崎小学校遺跡	宮崎市	宮崎市教育委員会2003	不明	167	壺	胴部	日向 C	中期中葉	1期			宮崎市教育委員会2003
				不明	167	壺	胴部	日向 C	中期中葉	1期			

南部九州における弥生時代瀬戸内系土器の基礎的研究

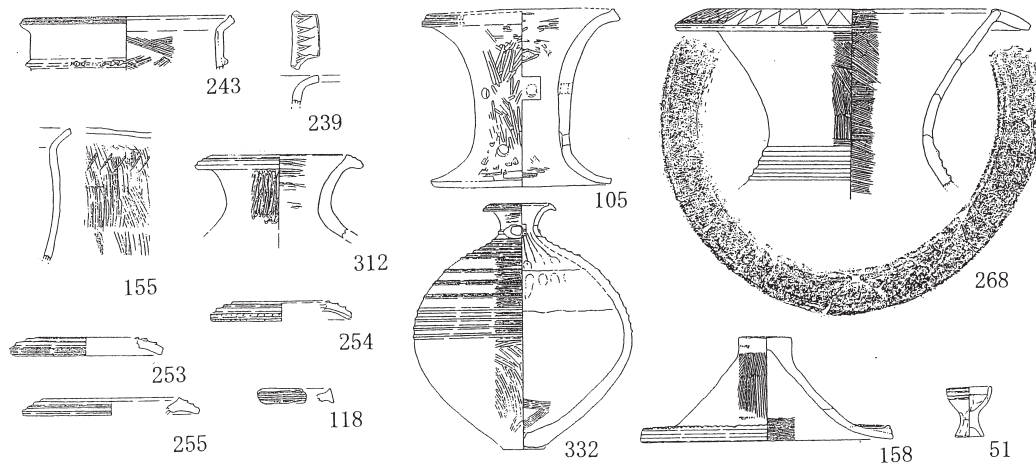
66	二本松遺跡	都城市	土器集中箇所 大浦朝剛	包合層	224	壺	口縁部	日向 A	中期末葉～後期初頭	1期	伊予系？	都城市教育委員会2010				
					225	壺	口縁部	瀬戸内 A	中期末葉～後期初頭	1期	伊予系？					
67	下大五郎遺跡	都城市	11号住居	包合層	226	高坏	脚部	A	中期末葉～後期初頭	1期	伊予系？	宮崎県埋蔵文化財センター2005 宮崎県埋蔵文化財センター1989c 都城市教育委員会2008 宮崎県埋蔵文化財センター2007d 都城市教育委員会2007b 都城市教育委員会2000 都城市教育委員会1990 都城市教育委員会2005 宮崎県埋蔵文化財センター2008a 宮崎県埋蔵文化財センター2002b 有明町教育委員会2003 松山町教育委員会1993				
					227	高坏	裾部	瀬戸内 A	中期末葉～後期初頭	1期	伊予系？					
					228	高坏	裾部	瀬戸内 A	中期末葉～後期初頭	1期	伊予系？					
					229	壺	口縁部	瀬戸内 A	中期末葉～後期初頭	1期	赤色塗彩					
					230	高坏	口縁部	A	中期末葉～後期初頭	1期	赤色塗彩					
					231	高坏	裾部	日向 A	中期末葉～後期初頭	2期	2号住居から同一面体断片、伊予系？					
					232	高坏	口縁部	日向 A	後期初頭	2期	靑、壺、長頸壺、鉢、磨製石織					
					233	壺	口縁部	瀬戸内 A	後期初頭	2期	穿孔有					
					234	無須壺	口縁部	瀬戸内 A	中期末～後期初頭	1期	SAA1茶報告、SA46N072之同一面体					
					235	甌	口縁・胴部	東部瀬戸内 A	中期末～後期初頭	1期	甌、壺、軽石製品					
					236	壺	肩部	日向 C	中期末～後期初頭	1期	甌、壺、鉢、磨石、台石、鉄矛					
					237	壺	口縁・胴部	大隅 B	中期末～後期初頭	1期	甌、石織					
71	加治屋 B 遺跡	都城市	埋納	覆土上層	238	壺	口縁・胴部	日向 A	中期末葉	1期	靑、壺、鉢	都城市教育委員会2007b				
					239	甌	口縁部	日向 B	中期末葉	1期	靑、壺、大甌					
					240	高坏	裾部	伊予 A	中期後～末葉	1期	靑、壺					
					241	壺	口縁部	伊予 A	中期後葉	1期	靑、壺					
					242	甌	口縁部	伊予 A	中期後葉	1期	靑、壺					
					243	甌	口縁部	日向 B	中期末葉	1期	中溝、凹鉢					
					244	壺	口縁部	瀬戸内 A	中期後葉	1期	靑、壺					
					245	壺	口縁部	大隅 B	中期末～後期初頭	1期	靑、壺					
					246	壺	口縁部	日向 A?	中期末～後期初頭	1期	なし					
					247	高坏	口縁部	大隅 A	中期末葉	1期	靑、壺、凹石、砥石					
					248	高坏	口縁部	瀬戸内 A	後期初頭?	2期	西瀬戸内系、方形ベクト状住居					
					79	下庭遺跡	大崎町	包合層	249	壺	口縁部		大隅 B	中期末葉	1期	伊予系？
250	壺	口縁部	瀬戸内 A	中期後～末葉					1期	大型住居2号でも出土している						
251	壺	口縁部	大隅 B	中期後～末葉					1期	突帯による胴凹縁？						
252	壺	口縁部	大隅 B	中期後～末葉					1期	突帯による胴凹縁？						
253	壺	口縁部	大隅 B	中期後～末葉					1期	突帯による胴凹縁？						
254	壺	口縁部	大隅 B	中期後～末葉					1期	突帯による胴凹縁？						
255	壺	口縁部	大隅 B	中期後～末葉					1期	突帯による胴凹縁？						
256	甌	口縁・胴部	瀬戸内 A	中期末～後期初頭					1期	靑、壺、石織、砥石						
257	壺	口縁部	大隅 B	後期初～前葉					2期	靑、壺、鉢、鉄、砥石						
258	壺	口縁部	大隅 B	後期初～前葉					2期	靑、壺、鉢、鉄、砥石						
259	壺	口縁部	大隅 B	後期初葉?					2期	靑、壺、壺、高坏、鉢						
80	益丸遺跡	大崎町	採集	包合層					260	甌	口縁部	大隅 B	後期初葉?	2期	混入か	鹿児島県教育委員会1984 鹿児島県立埋蔵文化財センター1983 鹿児島県立埋蔵文化財センター1986 鹿児島県教育委員会1980 鹿児島県教育委員会1983b 高山市教育委員会1996 鹿屋市教育委員会2008 志平町教育委員会1995
					261	甌	口縁部	大隅 B	後期初葉?	2期	混入か					
					262	甌	口縁部	大隅 B	後期初葉?	2期	混入か					
					263	壺	口縁部	大隅 B	後期初葉?	2期	混入か					
					264	壺	口縁部	大隅 B	後期初葉?	2期	混入か					
					265	壺	口縁部	大隅 B	後期初葉?	2期	混入か					
					266	壺	口縁部	伊予 A	中期末葉	1期	靑、壺、石織、砥石					
					267	長頸壺	口縁部	瀬戸内 A	中期後葉	1期	靑、壺、鉢、鉄、砥石					
					268	壺	口縁部	大隅 B	中期後～末葉	1期	靑、壺、鉢、鉄、砥石					
					269	壺	口縁部	伊予 A	中期末葉	1期	靑、壺、石織、砥石、砥石					
					270	壺	口縁部	伊予 A	中期後～末葉	1期	靑、壺、石織、砥石、砥石					
					81	東田遺跡	肝付町	包合層	271	壺	口縁部	伊予 A	中期後～末葉	1期	靑、壺、石織、砥石	
272	壺	口縁部	伊予 A	中期後～末葉					1期	靑、壺、石織、砥石						
273	壺	口縁部	伊予 A	中期後～末葉					1期	靑、壺、石織、砥石						
274	長頸壺	口縁部	瀬戸内 A	中期後～末葉					1期	靑、壺、石織、砥石						
275	長頸壺	口縁部	瀬戸内 A	中期後～末葉					1期	靑、壺、石織、砥石						
276	長頸壺	口縁部	瀬戸内 A	中期後～末葉					1期	靑、壺、石織、砥石						
277	高坏	口縁部	伊予 A	中期後～末葉					1期	靑、壺、石織、砥石						
278	高坏	口縁部	伊予 A	中期後～末葉					1期	靑、壺、石織、砥石						
279	高坏	口縁部	伊予 A	中期後～末葉					1期	靑、壺、石織、砥石						
280	高坏	口縁部	伊予 A	中期後～末葉					1期	靑、壺、石織、砥石						
87	王子遺跡	鹿屋市	包合層	281					壺	口縁部	伊予 A	中期末葉	1期	靑、壺、石織、砥石	鹿児島県教育委員会1985	
				282					壺	口縁部	大隅 B	中期後～末葉	1期	靑、壺、鉢、鉄、砥石		
				283	壺	口縁部	伊予 A	中期末葉	1期	靑、壺、鉢、鉄、砥石						
				284	壺	口縁部	伊予 A	中期後～末葉	1期	靑、壺、石織、砥石、砥石						
				285	壺	口縁部	伊予 A	中期後～末葉	1期	靑、壺、石織、砥石、砥石						
				286	壺	口縁部	伊予 A	中期後～末葉	1期	靑、壺、石織、砥石、砥石						
				287	長頸壺	口縁部	瀬戸内 A	中期後葉	1期	靑、壺、鉢、鉄、砥石						
				288	壺	口縁部	大隅 B	中期後～末葉	1期	靑、壺、鉢、鉄、砥石						
				289	壺	口縁部	伊予 A	中期末葉	1期	靑、壺、石織、砥石、砥石						
				290	壺	口縁部	伊予 A	中期後～末葉	1期	靑、壺、石織、砥石、砥石						
				291	壺	口縁部	伊予 A	中期後～末葉	1期	靑、壺、石織、砥石、砥石						



搬入土器



模倣土器

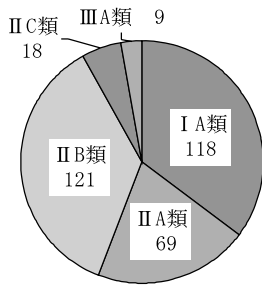


折衷土器

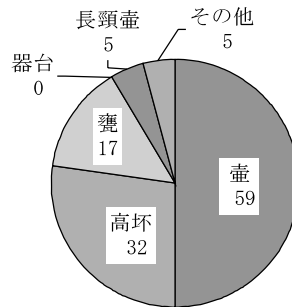
第4図 南部九州の瀬戸内系土器 (引用は各報告書より・S=1/8・番号は第2表と対応)

点で最も多く、続いて吉備、讃岐を中心とした東部瀬戸内が15点で続く。その他、中国山地～山陰や西南四国も1点ずつみられる。器種をみると（第6～10図）、搬入土器、模倣土器において壺や高坏といった貯蔵具・食膳具が主体を成していることが分かる。また、折衷土器では高坏の比率が搬入土器や模倣土器と比較して極めて少ないが、これは元々在地の器種構成の中に高坏が少ないことに起因するものであろう。壺が最も多いのは搬入土器や模倣土器と同様である。

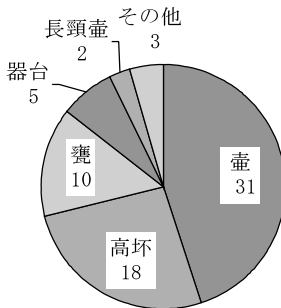
模倣土器をみると、器形や施文方法、器壁の厚さにおいて瀬戸内在地の土器と異なるものがいくつかみられる。例えば、宮崎市下郷遺跡環濠7出土の甕や右葛ヶ迫遺跡 SA7 出土の甕（第4図 No.150・187）は、全体的な形状は東部瀬戸内を中心に分布する甕と類似しているが、瀬戸内では内面に施されるヘラ削りがみられず器壁が厚くなっている。また、右葛ヶ迫遺跡の甕は底部形態が在地の甕に類似しており、在地土器である中溝式甕の影響を受けている可能性が考えられる。



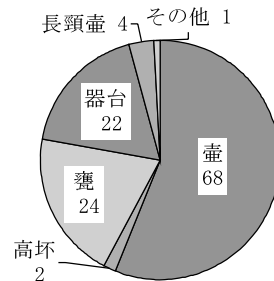
第5図 瀬戸内系土器の類型組成 (n=335)



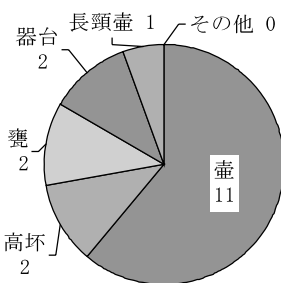
第6図 IA類の器種構成 (n=118)



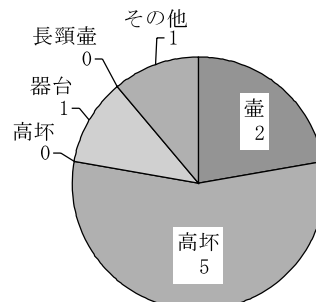
第7図 IIA類の器種構成 (n=69)



第8図 IIB類の器種構成 (n=121)

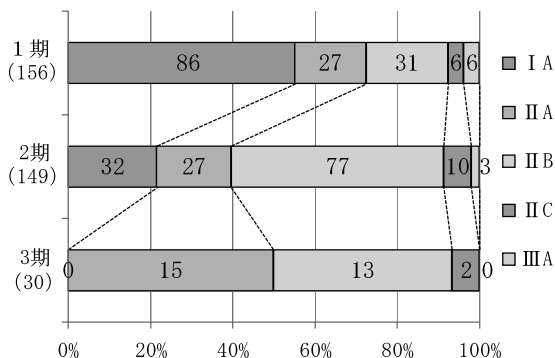


第9図 IIC類の器種構成 (n=18)



第10図 IIIA類の器種構成 (n=9)

折衷土器に取り入れられる瀬戸内系の属性をみると、凹線文（沈線化したものも含む）が圧倒的に多く、その他に斜位の連続刺突文や櫛描文、簾状文といった、視覚的に模倣されやすい属性が取り入れられていることが分かる。折衷土器には、属性が取り入れられる部位や技法が搬入土器とほぼ変わらないものと、属性をそのまま取り入れるのではなく、在地で変容させて取り入れているものの両者がみられる。後者の例としては、山ノ口式垂下口縁壺の口縁部上面に三角突帯を数条貼り付けて凹線状にしているものがある（第4図 No.253～255）。三角突帯を多条貼り付ける技法は、南部九州では様々な器種に用いられる主要な技法であるが、瀬戸内では主要な技法ではない。垂下口縁壺の口縁部上面に三角突帯が張り付けられる土器は一般的にみられるものではないため、これは凹線文を模倣したものと考えられる。さらに、瀬戸内系の高坏にみられる矢羽根透かしを沈線文で模倣したものも2点出土している（第4図 No.239・268）。こうした他系統の属性を在地の技法を用いて変容させ取り入れている事例は、折衷土器の製作者を考える上で非常に興味深い。



第11図 時期毎の出土量 (n=335)

では、これらの瀬戸内系土器の様相は、時間軸に沿ってどのように変化していくのだろうか。瀬戸内系土器の出土量・類型や器種の比率・分布・出土状況を見ると、中期中葉～末葉（1期）、後期初頭～中葉（2期）、後期後葉～末葉（3期）という三つの画期を設定することができる（第11図）。以下、時期区分に沿って瀬戸内系土器の様相をみていきたい。

1期（中期中葉～末葉）

1期は、瀬戸内系土器の流入が始まる時期であり、特に搬入土器の流入が最も盛んになる。搬入土器の起源地をみると伊予が圧倒的に多く、特に伊予系土器の壺と高坏が搬入土器全体の43%（86点中37点）で主体を成している。その他、吉備や西南四国、中国山地～山陰のものもわずかながら確認でき、瀬戸内の各地から土器が搬入されていることが分かる。

器種についてみると（第3表）、搬入土器は伊予系土器の高坏と壺を主体とし、高坏、長頸壺、無頸壺、把手付水差といった貯蔵具・食膳具が中心となるが、煮沸具である甕も一定量存在する。模倣土器でも壺が最も多いが、脚台付壺、ジョッキ形土器といった搬入土器にはみられない器種が存在している。折衷土器でも壺が主であるが、その多くは在地の山ノ口式垂下口縁壺の口縁部上面に凹線もしくは多条沈線を施したものである。

分布をみると日向～大隅にかけて多く分布しており、特に宮崎平野の沿岸部に分布の集中がみられる（第12～15図）。類型ごとの分布をみても、それぞれに大きな偏りはみられず、いずれの類型も広域に分布している。なお、薩摩西部では1遺跡2点しか出土しておらず、分布が希薄な地域となっている。

出土状況を見ると、主に集落を中心とした居住空間から出土しており、遺跡や遺構において、

第3-1表 類型毎の器種の変遷（日向北部）

	1期	2期	3期
A類	壺5・高坏5・無頸壺2	壺2	
A類	壺3・高坏1・甕1	壺1・高坏1・甕1	壺1
B類		壺1・甕4・器台1	器台1
C類		壺2・高坏2・器台1	壺1
A類		把手付水差1	

第3-2表 類型毎の器種の変遷（日向中部）

	1期	2期	3期
A類	壺17・高坏17・甕10・長頸壺1・把手付水差1	壺10・高坏1・甕1	
A類	壺6・高坏4・甕2・脚台付壺2	壺10・高坏7・甕2・器台1	壺4・高坏3・甕1・器台3・長頸壺2
B類	壺3・甕2・器台2・長頸壺1・蓋1	壺17・甕16・器台14・長頸壺2	壺5・高坏2・器台1・長頸壺1
C類	壺2・甕1	甕1・器台1	壺1
A類	高坏1	器台1	

第3-3表 類型毎の器種の変遷（日向西南部）

	1期	2期	3期
A類	壺5・高坏3・甕1・無頸壺1	壺2・高坏1・甕1	
A類	壺3	高坏1	器台1
B類	壺2・甕2		器台2
C類	壺1		
A類	高坏3		

第3-4表 類型毎の器種の変遷（大隅～薩摩東部）

	1期	2期	3期
A類	壺9・高坏4・甕1・長頸壺4	壺5・高坏1・甕2	
A類	壺1・甕2・ジョッキ形土器1		
B類	壺18	壺15・器台1	壺1
C類	壺1・長頸壺1	壺2	
A類	壺1	壺1	

第3-5表 類型毎の器種の変遷（薩摩西部）

	1期	2期	3期
A類		壺4・甕1・無頸壺1	
A類	壺1	壺1・高坏1・甕1	
B類		壺6	
C類		壺1	
A類	高坏1		

在土器と共に1～数点の割合で出土する場合が多い。ただし、宮崎市宮崎小学校遺跡（宮崎市教育委員会2002）では、包含層からではあるが搬入土器の甕を主体として、壺、高坏という同時期（瀬戸内 様式）の複数の器種がまとめて出土しており（第23図）、他の遺跡と若干様相が異なっている。また、出土状況から瀬戸内系土器が祭祀行為に用いられたと判断できるものは確認できない⁷。なお、発掘調査面積とも関連する可能性があるが、拠点集落と考えられる遺跡からは多く出土する傾向にある。

2期（後期初頭～中葉）

2期になると、搬入土器の数が減少する代わりに折衷土器の数が増加し、瀬戸内系土器全体では前の時期とほぼ変わらない出土数がみられる。搬入土器は、伊予を中心とした西部瀬戸内のもの（6点）と、吉備や讃岐といった東部瀬戸内（3点）のものがみられるが、模倣土器と折衷土器をみると東部瀬戸内の影響を受けたと考えられるものの方が若干多く（西部瀬戸内系5点、東部瀬戸内系13点）みられる。

器種はいずれの類型でも1期と同様に壺が最も多いが、1期にはわずかしきみられなかった器台が20点と増加している等、器種構成に変化がみられる（第3表）。また、折衷土器の器種をみると、日向では甕・壺・器台が主体を占めるが、大隅・薩摩では壺が主体となり、地域によって折衷土器の主体となる器種に差異がみられる。

分布は、日向～大隅では1期と比較して若干の遺跡数の減少が認められるものの、大きな変化は無い（第16～19図）。しかし、薩摩西部では遺跡数・出土数共に増加しているため、分布が最も広域になる。類型ごとの分布をみると、搬入土器は広域に分布しているが、模倣土器は日向に集中しており、特に大隅では分布が空白となっている。また、日向南西部では折衷土器の出土がみられない。

出土状況は1期と同様に居住空間からの出土が主であり、何らかの祭祀行為を想定させる例は確認できない。例外として、志布志市京ノ峯遺跡（松山町教育委員会1993）では3号円形周溝墓の周溝から搬入土器の高坏が出土している。しかし、周溝墓と土器の年代が異なるとする見解もあり、比較検証できる同時期の墓制資料も無いため、ここでは墓域（非居住空間）からの出土としては扱わないこととする。出土量をみると、1期と同様に拠点集落と考えられる遺跡から多く出土する傾向がみられ、宮崎市下那珂遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター2004）からは折衷土器を主体として32点の出土がみられる。

3期（後期後葉～末葉）

3期では、明確に搬入土器と判断し得るものがみられなくなり、模倣土器と折衷土器のみとなる。器種についても、甕がわずかに日向中部で模倣土器1点と減少し、壺や高坏、器台といった貯蔵・食膳具にほぼ限定される（第3表）。起源地については、破片資料が多く不明瞭な部分が多いが、東部瀬戸内のものが多いようである。また、西部瀬戸内や西南四国のものも各1点ずつみられる。

分布は、大隅で1遺跡1点みられる他は日向中部に限定され、宮崎平野を中心に分布するようになる（第20～22図）。類型ごとの分布に大きな偏りはみられない。

7 錦江町山ノ口遺跡は祭祀遺跡である可能性が指摘されているが、（河口1960）ジョッキ形土器は工事中採集のものであり、明確に祭祀に伴うものかどうかについては検討を要する。



第12図 1期の分布 (番号は表2と対応)



第13図 1期の搬入土器の分布 (番号は表2と対応)



第14図 1期の模倣土器の分布 (番号は表2と対応)



第15図 1期の折衷土器の分布 (番号は表2と対応)



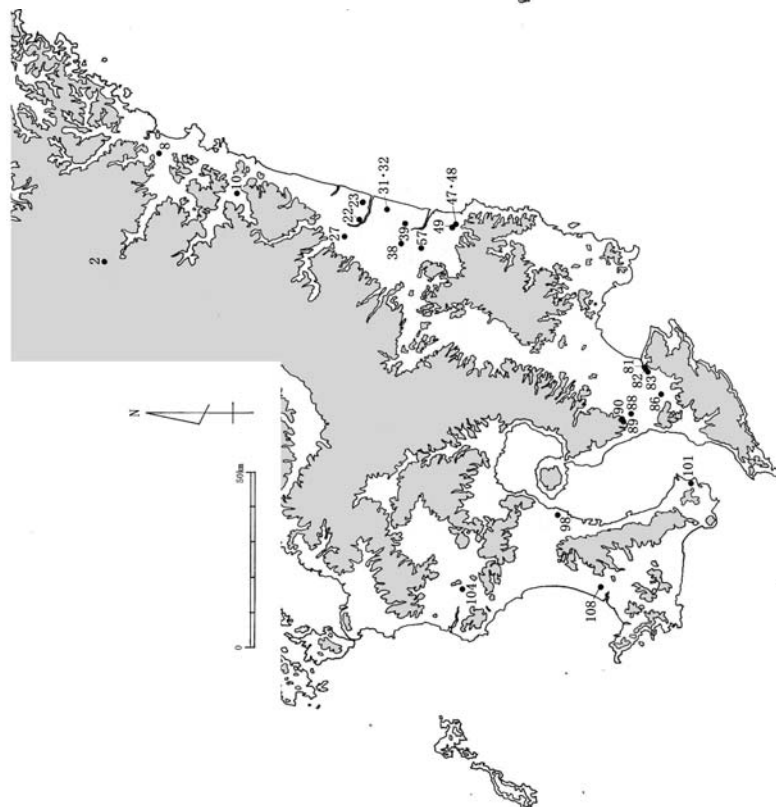
第16図 2期の分布 (番号は表2と対応)



第17図 2期の搬入土器の分布 (番号は表2と対応)



第18図 2期の模倣土器の分布 (番号は表2と対応)



第19図 2期の折衷土器の分布 (番号は表2と対応)



第20図 3期の分布 (番号は表2と対応)



第21図 3期の模倣土器の分布 (番号は表2と対応)



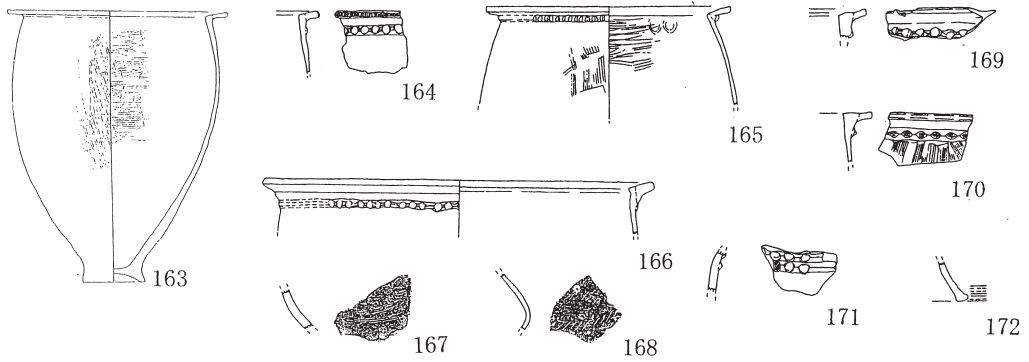
第22図 3期の折衷土器の分布(番号は表2と対応)

出土状況は1期, 2期と同様に居住空間からの出土が主であるが, 集落からの出土量が減少し, 代わりに非居住空間である墓域からの出土が増加する傾向にある(第24図)。特に, 階層的に高位に位置づけられると考えられる墓に供献されたものがみられる点には注目される。これらの墓域から出土する瀬戸内系土器は, 在地土器や他地域系の土器と伴って出土しており, 例えば川南町東平下A遺跡1号円形周溝墓では在地土器と庄内式甕が, 小林市大萩遺跡5号土壇墓では在地土器と重孤文長頸壺(免田式)の搬入土器等が伴っている。

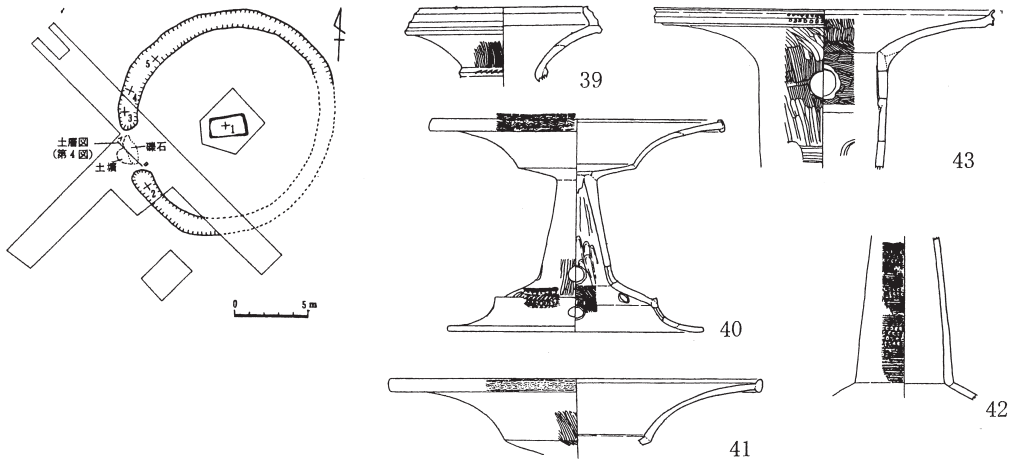
このように, 1~3期の瀬戸内系土器の動態をみると, 瀬戸内系土器は南部九州在地の土器様式自体には大きな影響は与えていないことが分かる。折衷土器という形で在地土器への影響がみられるものの, こうした土器は様式の中で普遍的に存在するものではなく, また瀬戸内系土器のある器種が南部九州在地の様式の中に取り込まれているといった状況もみられない。瀬戸内系土器は, あくまで客体的なものとして存在し, 在地土器に与える影響も限定的である。

以上の検討の結果から, 全体に共通する傾向を要約すると主に以下の6点に集約される。

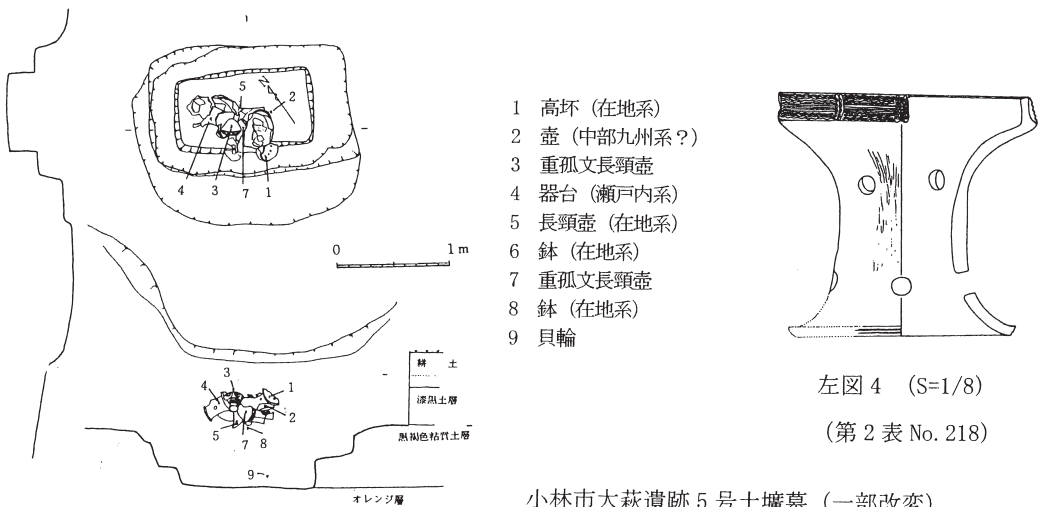
- ① 搬入土器出土数のピークが1期に集中しており, 後期には搬入土器が減少すると共に折衷土器の出土数が増加する。さらに3期では搬入土器の出土がみられなくなる。
- ② 瀬戸内系土器で主体となる器種は, 全時期を通じて貯蔵具・食膳具である。
- ③ 中期における搬入土器の起源地は伊予を中心とした西部瀬戸内が主体となる。



第23図 宮崎市宮崎小学校遺跡出土の伊予系土器
(宮崎市教育委員会2002・S=1/8・番号は第2表と対応)



川南町東平下A遺跡1号円形周溝墓 (番号は第2表と対応)



左図4 (S=1/8)

(第2表 No. 218)

小林市大萩遺跡5号土壙墓 (一部改変)

第24図 墓域から出土する瀬戸内系土器 (引用は各報告書より・S=1/8)

- ④ 瀬戸内系土器の出土状況を見ると、1期～2期では居住空間からのみ出土するが、3期では墓域からの出土がみられる。
- ⑤ 瀬戸内系土器が主体となる遺跡・遺構は全時期を通じてみられない。
- ⑥ 在地の土器様式自体には影響を与えていない。

以上を南部九州における瀬戸内系土器の特徴として捉えておく。

4-2. 瀬戸内における南部九州系文化要素

次に、瀬戸内における南部九州系文化要素についてみてみたい。瀬戸内では、中期前葉～末葉に南部九州系の土器や竪穴住居形態の出土がみられる。

岡山県岡山市南方（済生会）遺跡（岡山市教育委員会2005）（第25図）

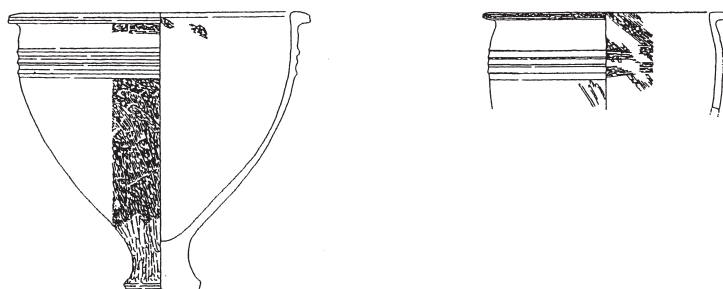
河川跡から大隅半島の胎土の incoming 式甕が出土している。岡山在地の土器との共伴関係等は不明であるが、南部九州では中期中葉ごろに位置付けられる土器である。南方（済生会）遺跡では、南部九州系土器以外にも豊後系土器である下城式が出土しているが、incoming 式が甕のみであったのに対し、下城式は壺に限られているという器種の違いがみられる。

愛媛県松山市文京遺跡（愛媛大学・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1992・愛媛大学埋蔵文化財調査室2002）（第26図）

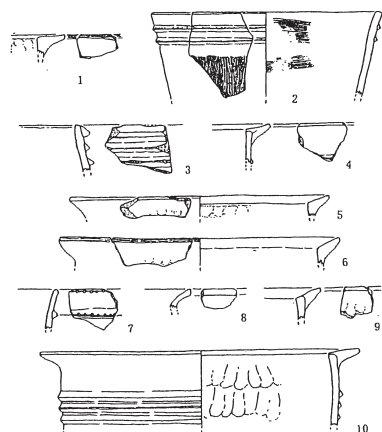
大隅半島の胎土の山ノ口 式甕、宮崎平野の胎土と考えられる下城式甕等が出土している。数量的には山ノ口 式甕の方が多し。包含層出土であるため、在地土器との共伴関係は不明であるが、南部九州では中期後葉～末葉に位置付けられる土器である。文京遺跡では南部九州系の土器だけでなく、北部九州や豊後といった九州系の土器の出土もみられる。

また、こうした南部九州系の土器だけでなく、南部九州に特徴的な花弁状間仕切住居と呼ばれる住居形態も1基検出されている。上部が削平されており遺物も出土していないが、報告書によれば後期初頭を下るものではないという（栗田1992）。この花弁状間仕切住居と南部九州系土器の出土地点はやや離れているが、年代的には同時期のものであると考えられる。

以上、瀬戸内で出土する南部九州系文化要素をみると、土器は大隅半島からの搬入土器を中心として、日向からの搬入土器も少量存在していることが分かる。また、それらは甕に限定さ

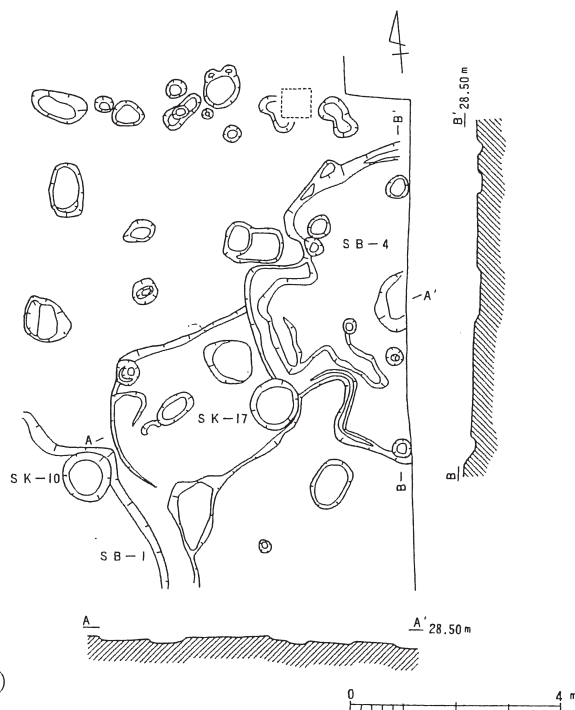


第25図 岡山市南方（済生会）遺跡出土の incoming II 式甕（岡山市教育委員会2005・S=1/8）



南部九州系土器（第16次調査）

（山ノ口Ⅱ式1・4・5・8～10・下城式2・3・7）



花卉状間仕切住居（第3次調査）

第26図 松山市文京遺跡の南部九州系文化要素

（愛媛大学・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1992・愛媛大学埋蔵文化財調査室2002）

れており、南部九州でみられる瀬戸内系土器の器種が多様であるのとは大きく異なる。さらに、花卉状間仕切住居という、南部九州系の遺構もみられる。これらの南部九州系文化要素は中期中葉～末葉の時期に限定されており、数量的にも南部九州で出土する瀬戸内系土器と比較すると圧倒的に少ないことが特徴である。

5. 考察

以上の検討結果から、南部九州と瀬戸内との間にみられる関係について考察してみたい。まず、1期～3期を通した特徴として、瀬戸内系土器が南部九州の土器様式自体に大きな影響を与えていないことが確認された。従って、瀬戸内からの土器様式の伝播といったものではなく、何らかの社会的背景によって持ち込まれたり、製作されたものであることが考えられる。以下、その具体的な考察を時期毎に述べていきたい。

1期の搬入土器の出土状況を見ると、主に居住空間から出土しており、搬入土器が主体となって出土する遺跡・遺構は確認されない。また、それらが出土する遺構についても、瀬戸内に分布する形態の竪穴住居址等はみられない。こうした、南部九州在地土器のセットの中に瀬戸内

系土器の搬入土器が客体的に伴うという出土状況からは、瀬戸内からの移住者⁸が自分たちの土器をセットで持ち込んで使用したという状況は考え難いように思われる。ただし、宮崎小学校遺跡のような、比較的限定された時期の複数の器種がまとまって出土している遺跡については、瀬戸内の人々が一定期間滞在⁹していた痕跡である可能性も推測される。

模倣土器や折衷土器の出土状況も搬入土器と同様である。これらは搬入土器に影響されて在地で製作され、搬入土器と同様に居住空間において用いられたものと考えられる。栗畑は1期の折衷土器の中で、「凹線文の施文方法と部位についてより忠実な採用がみられる」（栗畑2000b, p.49）土器については、「何らかのかたちで瀬戸内系の凹線文を理解している人物が土器の製作にかかわっていた」（同上）可能性が考えられるとしているが、それは瀬戸内の土器製作者と在地の土器製作者のどちらの場合も考えられるだろう。

1期の瀬戸内で出土する南部九州系土器は現段階では甕に限定されており、出土数も南部九州における瀬戸内系土器と比較すると圧倒的に少ない。また、こうした南部九州系土器が、瀬戸内在地の土器様式に何らかの影響を与えている事例は確認できない。さらに、文京遺跡で検出された花卉状間仕切住居は、文京遺跡の中でもこの1基だけであり、明らかに他の住居形態とは異質である。文京遺跡の居住者がこうした住居形態を模倣したとも考えられるが、南部九州から搬入された土器が存在していることから、この花卉状間仕切住居は南部九州から訪れた人間により造られ、一定期間そこに滞在していた痕跡であると考えられよう。伊予における拠点集落である文京遺跡で南部九州系の土器や竪穴住居が出土することは、南部九州における1期の瀬戸内系土器の主体が伊予系であることと関連すると考えられる。

このように、土器の様相からみると、中期後葉～末葉に南部九州と伊予を中心とする西部瀬戸内との間に、質・量的な差は存在するものの、相互的で直接的な交流が行われていたことが想定される¹⁰。田崎博之は、中期後葉（瀬戸内 様式）以降に瀬戸内各地でみられる搬入土器や模倣土器の事例の多さと移動範囲の広がりから、「中期後葉～後期初頭を画期として、灘を単位とした交流圏をこえ、直接的な接触が、恒常的に保たれた広域交流システムが確立されていた」（田崎1995, pp.42-43）と述べている。また、大陸系文物の東方への流入も中期後葉以降に顕在化する等（寺澤1985）、中期から後期の移行期には広域交流が活発化することが指摘されている（西谷2002）。1期の南部九州と西部瀬戸内との間の相互的な交流は、こうした西日本における広域交流の活発化と連動したものと考えられる。

2期になると瀬戸内系土器の搬入土器の数が減少し、折衷土器が増加する。起源地についても、伊予からの搬入土器の減少がみられると共に、模倣土器や折衷土器の中に東部瀬戸内の影響が強くなるという様相の変化がみられる。出土状況からは集団の移住等は想定されず、瀬戸内系土器は1期と同様に居住空間において用いられていたと考えられる。折衷土器をみると、

8 ここでいう移住とは、一定規模の集団が定住を目的として他の地域に移り住む場合のことを言う。ある地域の中に、他地域系の文化要素のみが出土する、あるいはそれが主体となる住居社やコロニー的な集落といったものが検出される場合には、他地域からの移住が行われた可能性が想定される。

9 ここでいう一定期間の滞在とは、小規模の集団が交流や交易を目的として、他地域に一定期間滞在する場合を指す。

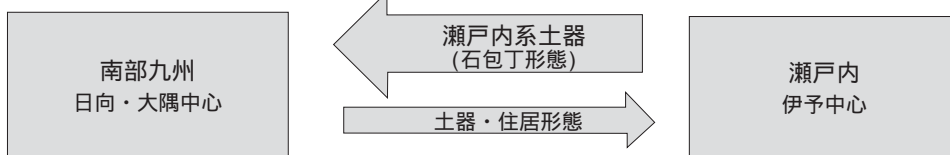
10 1期以降には、西部瀬戸内で成立した方形石包丁が日向や大隅で主体となる（下條2002・長津2003）。これについても、両地域間の交流によりもたらされたものであろう。

日向では甕、壺、器台といった器種が製作されるのに対し、薩摩・大隅では壺が主体となっており、特に折衷土器の甕は製作されていない。こうした差異がみられるのは、地域によって他系統の土器属性の取り入れ方が異なるためと考えられよう。また、模倣土器の分布が大隅で希薄となることも、地域的な特徴として捉えられる。

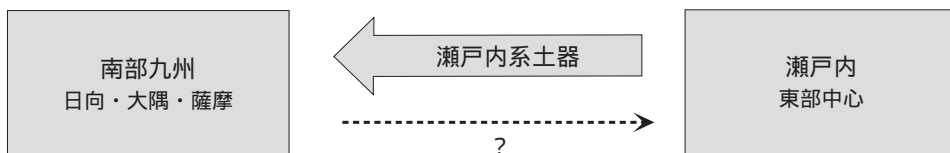
なお、興味深い事例として大隅半島で製作された折衷土器が薩摩半島西部で出土する事例(第3表 No.331等)が存在しており、南部九州内部における地域間交流に伴って、他地域に搬入された土器も存在することが想定される。こうした事例は、南部九州内部における小地域間交流の実態を検討する上で興味深い。

2期以降には、瀬戸内において南部九州系の文化要素は確認されておらず、相互的な交流の存在については不明瞭である。2期にみられる瀬戸内系土器は、東部瀬戸内を中心とした地域との間における何らかの地域間関係を背景として持ち込まれたり製作されたものと考えられるが、土器の移動や土器属性の影響に関してはより一方向的な傾向が強くなることが特徴である。またこの時期には、南部九州と入れ替わるように、中期に瀬戸内系土器がほとんどみられなかった北部九州に東部瀬戸内系土器が流入するようになる。この東部瀬戸内系土器流入の背景には、大陸系文物の入手を目的とした交流があると指摘されているが(西谷2005)、2期に南部九州でみられる瀬戸内系土器の動態が何を背景としたものかについても、他の文化要素の動態と照らし合わせながら検討していく必要があるだろう。

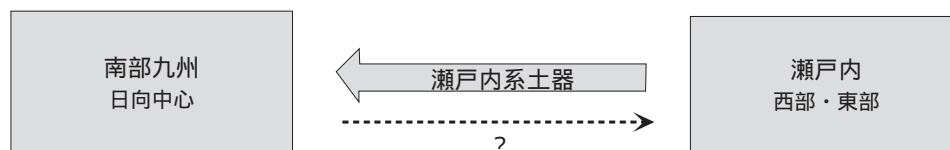
1期 (相互的交流・搬入多)



2期 (相互的交流?・模倣多)



3期 (相互的交流?・瀬戸内系土器の減少)



第27図 地域間関係模式図

(矢印の太さは搬入土器の量と土器属性影響の大きさを表す)

3期になると瀬戸内系土器自体の出土数が減少し、搬入土器も現段階では出土していない。北部九州を含む九州全域において瀬戸内系土器が多くみられるのは中期後半～後期前半である(西谷2005)ことが指摘されており、南部九州において3期に瀬戸内系土器が減少する傾向は、瀬戸内から九州への土器移動自体が衰退したことに起因すると考えられる。起源地については不明瞭な部分も多いが、2期に引き続いて東部瀬戸内の影響が強いものと想定される。

3期にみられる特徴は、非居住空間である墓域において、墳墓に供献された状態で出土する事例が増加することである。この供献された土器の中には、西部瀬戸内型器台(第24図 No.43)のような墳墓への供献に特化した土器も含まれており、元々墳墓へ供献するために製作された可能性が高い。南部九州では弥生時代の墓地遺跡の事例が少ないため、現時点では深く考察することはできないが、こうした他地域系の土器が墳墓に供献されることは、南部九州と瀬戸内の間における関係の変化だけでなく、南部九州内部における供献土器の様相の変化も含めて考えていく必要があるだろう。

6. まとめ

以上のように、1期から3期を通してみると、土器の移動や土器属性の影響が、瀬戸内から南部九州へ一方向的であることが確認された。これは先行研究で指摘されていたものを追認した形になるが、本稿では新たに、各時期における具体的な様相が一様ではなく、時期的に様々な変異がみられることを明らかにできた(第27図)。2期以降、搬入土器の流入は徐々に減少していくが、模倣土器や折衷土器の製作は3期まで継続されていることから、瀬戸内との地域間関係は、様相を変えながらも継続的に続いていたものと想定される。

ところで、こうした一方向的な土器の移動は、南部九州と瀬戸内との間のみにみられるものではない。例えば、北部九州の須玖式(中期)や中部九州の重孤文長頸壺(後期)は南部九州へ多くの流入がみられるが、反対に南部九州からそれらの地域へ土器が移動する事例はほとんど確認されていない。弥生時代における南部九州への土器移動は、ほとんどの場合が一方向的なものなのである。こうした土器の移動にみられる非対称的な関係性が、今後南部九州と他地域との関係の背景を考える上で重要な視点になるものと考えられる¹¹。

本稿では、模倣土器や折衷土器の細かな属性の検討等、筆者の力量不足で触れられなかった課題も多く残されている。また、石包丁のような他の文化要素にみられる瀬戸内からの影響についても詳細に検討し、瀬戸内系土器の動態とどのように関連するのかを検討する必要もある。これらについては、今後の課題としたい。

謝辞

本稿は、筆者が平成20年度に鹿児島大学大学院に提出した修士論文と、平成22年度に鹿大史学会例会(2010年7月10日、鹿児島大学)で口頭発表した内容を基に加筆・修正したものである。執筆にあたって、指導教官である渡辺芳郎先生を始め、新田栄治先生、本田道輝先生、鹿

11 南部九州から他地域へ土器が移動した事例としては、先述した南方(済生会)遺跡、文京遺跡の他、長崎県壱岐市原の辻遺跡で入来式(中期前葉頃)とみられる甕が出土している(宮崎2005)。

児島大学埋蔵文化財調査室の中村直子先生，新里貴之先生，寒川朋枝先生には様々な面でご指導いただいた。さらに，修士論文執筆の段階から，資料調査等で多くの方々にご協力いただいた。文末ながら御芳名を記して感謝申し上げます。

石村友規 内村憲和 甲斐貴充 鐘ヶ江賢二 鎌田洋昭 加覧淳一 河野賢太郎 栗山葉子
栞畑光博 田崎博之 中村耕治 樋渡将太郎 藤井大祐 真邊彩 三吉秀充 八木澤一郎 吉
田広 吉本正典 指宿市考古博物館時遊館 COCCO はしむれ 愛媛大学埋蔵文化財調査室 大
崎町教育委員会 鹿児島県立埋蔵文化財センター 鹿屋市教育委員会 新富町教育委員会 都
城市教育委員会 宮崎県立西都原考古博物館 宮崎県埋蔵文化財センター 宮崎市教育委員会
(敬称略・50音順)

【引用・参考文献】

- 池畑 耕一 1976 「石包丁にみられる瀬戸内地方と宮崎県との関係」『宮崎考古』第2号 pp.4-5 宮崎考古学会。
1992 「南九州での掘立柱建物出現の意味するもの」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集
pp.141-147 埋蔵文化財研究会。
- 石川 悦雄 1983 「日向における外来系土器の伝播とその地域性() - 瀬戸内・畿内系土器の流入とその展開 - 」
『研究紀要』No.9 pp.109-126 宮崎県総合博物館。
- 石川 恒太郎 1949 『延岡市史』第1巻 延岡郷土研究会。
- 梅木 謙一 1995 「西瀬戸内地方における弥生中期の土器様相」『古文化談叢』第34集 pp.143-158 古文化研
究会。
2004 「四国・南九州間における凹線土器の交流」『西南四国 - 九州間の交流に関する考古学的研
究』課題番号14510428 平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基礎研究(C)(1)) pp.49
-64 下條信行。
- 上村 俊雄 2007 「岡山市南方(済生会)遺跡出土の incoming 式土器」『考古学ミュージアム調査研究報告』第4
集 pp.18-20 鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム。
- 河口 貞徳 1951 「一の宮遺跡報告」『考古学雑誌』第37巻第4号 pp.16-23 日本考古学会。
1960 「山ノ口遺跡」『鹿児島県文化財調査報告書』第7集 鹿児島県教育委員会。
2005 「高橋貝塚」『先史・古代の鹿児島 遺跡解説(資料編)』 pp.223-227 鹿児島県教育委員会。
- 栗田 茂敏 1992 「3.小結」『文京遺跡第2・3.5次調査』松山市文化財調査報告書第28集 pp.119-121 愛媛大学・
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター。
- 栞畑 光博 2000a 「中溝式土器の検討 - 宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年に
むけて - 」『古文化談叢』第45集 pp.73-99 九州古文化研究会。
2000b 「折衷土器二例」『大河』第7号 pp.45-51 大河同人。
- 近藤 協 1989 「野稲尾遺跡」『宮崎県史 資料編』考古1 pp.448-451 宮崎県。
- 沢 皇臣 1975 「東白杵郡北方町出土の弥生土器」『宮崎考古』第1号 pp.8-9 宮崎考古学会。
- 下條 信行 2002 「瀬戸内における石包丁の型式展開と文化交流」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古
稀記念論集 pp.351-374 犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会。
2004 「 . 総括 3.西部瀬戸内(中予) - 南予 - 南九州」『西南四国 - 九州間の交流に関する考古
学的研究』課題番号14510428 平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基礎研究(C)(1))
pp.235-237 下條信行。
- 菅原 康夫・梅木 謙一編 2000 『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社。

- 田崎 博之 1995 「瀬戸内における弥生時代社会と交流 土器を中心として」『瀬戸内海地域における交流の展開』古代王と交流6 pp.29-59 名著出版。
- 1998 「九州系の土器からみた凹線文系土器の時間的位置」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7年度～平成9年度科学研究費補助金(基礎研究B)研究成果報告書 pp.143-195 研究代表者 下條信行。
- 2004 「土器焼成・石器製作残滓からみた弥生時代の分業と集団間交流システムの実証的研究(課題番号13610469)」平成13～平成15年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書。
- 田中 茂 1970 「瀬戸内地方直系高坏の新例」『宮博館報』第17号 pp.21-13 宮崎県立博物館。
- 1975 「宮崎県出土の丹彩袋状口縁壺形土器について」『研究紀要』No.3 pp.45-54 宮崎県総合博物館。
- 1989 「差木野遺跡」『宮崎県史 資料編』考古1 pp.406-408 宮崎県。
- 都出 比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店。
- 坪根 伸也 2004 「東九州における弥生時代中期土器の諸相 - 大分平野(別府湾岸地域)を中心とする中期土器の諸相 -」『Archaeology From the South』鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集 pp.95-105 鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会。
- 寺沢 薫・森岡 秀人 1989 『弥生土器の様式と編年』近畿編 木耳社。
- 1990 『弥生土器の様式と編年』近畿編 木耳社。
- 中里 伸明 2009 「第 -1章 総括(弥生時代)」『戸坂遺跡』 pp.152-190 熊本市教育委員会。
- 中園 聡 1993a 「弥生時代中期土器様式の併行関係 - 須玖 式期の九州・瀬戸内 -」『史淵』 pp.33-53 九州大学文学部。
- 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類学研究』第9号 pp.104-119 人類史研究会。
- 2000 「沖縄諸島出土の九州系弥生土器」『琉球・東アジアの人と文化』高宮廣衛先生古稀記念論集(上巻) pp.111-130 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会。
- 長津 宗重 2003 「日向における石包丁の展開」『西南四国 - 九州間の交流に関する考古学的研究』課題番号14510428 平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基礎研究(C)(1)) pp.83-104 下條信行。
- 中村 直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 pp.57-76 鹿児島大学法文学部考古学研究室。
- 西谷 彰 2002 「弥生時代後半期における土器編年の併行関係 - 西日本を中心に -」『古文化談叢』第48集 pp.85-107 九州古文化研究会。
- 2005 「弥生時代における土器の長距離移動」『待兼山考古学論集』都出比呂志先生退任記念 pp.209-226 大阪大学考古学研究室。
- 野間 重孝 1989 「檜遺跡」『宮崎県史 資料編』考古1 pp.529-533 宮崎県。
- 東 憲章 2005 「宮崎市阿波岐原出土の瀬戸内系土器」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第1号 pp.30-32 宮崎県立西都原考古博物館。
- 平 美典 2004 「弥生中期土器の併行関係の現状と編年の課題 - 北部九州における中末後初の移行期をめぐって -」『九州考古学』第77号 pp.59-82 九州考古学会。
- 本田 道輝 1980 「松木園遺跡出土の土器について」『鹿児島考古』第14号 pp.112-123 鹿児島県考古学会。
- 1992 「松木園遺跡」『鹿児島県下の弥生土器』鹿児島県考古学会秋季大会資料 pp.30-31 鹿児島県考古学会。
- 2005 「松木園遺跡出土の特殊な土器について」『鹿児島考古』第39号 pp.56-61 鹿児島県考古学会。
- 正岡 睦夫・松本 岩雄 1992 『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社。
- 松永 幸寿 2004 「日向における古式土師器の成立と展開」『西南四国 - 九州間の交流に関する考古学的研究』課題番号14510428 平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基礎研究(C)(1)) pp.147-

198 下條信行。

- 松村 さを里 2008 「13 西部瀬戸内における弥生時代器台の展開について - 伊予地方を中心に - 」 『妙見山 1 号墳 - 西部瀬戸内における初期前方後円墳の研究 - 』 報告・論考編 pp.335-355 愛媛県今治市教育委員会・愛媛大学考古学研究室。
- 宮崎 貴夫 2005 「遺物 1.土器」 『原の辻遺跡 総集編 - 平成16年度までの調査成果 - 』 原の辻遺跡調査事務所調査報告第30集 pp.109-131 長崎県教育委員会。
- 森 貞次郎 1958 「神武さまの使った土器(一) - 東九州の櫛目文土器 - 」 『九州考古学』 第3・4号 p.4 九州考古学会。
- 1960 「宮崎県憶遺跡」 『日本農耕文化の生成』 pp.183-189 日本考古学協会。
- 1966 「弥生文化の発展と地域性 - 九州 - 」 『日本の考古学』 pp.32-80 河出書房。

【引用・参考報告書】

○宮崎県

- 北浦町教育委員会 1997 『中野内遺跡』 北浦町文化財発掘調査報告書第1集。
- 清武町教育委員会 2004 『須田木遺跡』 清武町埋蔵文化財調査報告書第12集。
- 国富町教育委員会 1985 『井水地下式横穴墓群 市の瀬地下式横穴墓群 上ノ原遺跡』 国富町文化財調査資料第4集。
- 西都市教育委員会 2003 『市内遺跡発掘調査概要報告書』 西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第36集。
- 新富町教育委員会 1985 『川床地区遺跡』 新富町文化財調査報告書第3集。
- 1986 『新田原遺跡 瀬戸口遺跡 蔵園地下式横穴墓』 新富町文化財調査報告書第4集。
- 1986 『川床遺跡』 新富町文化財調査報告書第5集。
- 1992 『八幡上遺跡 七又木遺跡 銀代ヶ迫遺跡』 新富町文化財調査報告書第13集。
- 高岡町教育委員会 2001 『的野遺跡』 高岡町埋蔵文化財調査報告書第20集。
- 高千穂町教育委員会 2000 『岩戸五ヶ村遺跡』 高千穂町文化財調査報告書第12集。
- 田野町教育委員会 2000 『本野遺跡(2)(弥生時代の調査)』 田野町文化財調査報告書第33集。
- 2003a 『高野原遺跡 B・C区(3)(弥生時代の調査)』 田野町文化財調査報告書第46集。
- 2003b 『鹿村野地区遺跡』 田野町文化財調査報告書第47集。
- 都農町教育委員会 1989 『新別府下原遺跡』 都農町文化財調査報告書第2集。
- 野尻町教育委員会 1988 『紙屋城址遺跡』 野尻町文化財調査報告書第3集。
- 延岡市教育委員会 1998 『平成9年度 市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 延岡市文化財調査報告書第19集。
- 都城市教育委員会 1990 『向原第1・第2遺跡』 都城市文化財調査報告書第11集。
- 2000 『池ノ友遺跡(第1次調査)』 都城市文化財調査報告書第49集。
- 2005 『高田遺跡』 都城市文化財調査報告書第70集。
- 2007a 『今房遺跡』 都城市文化財調査報告書第80集。
- 2007b 『加治屋 B 遺跡(縄文時代・弥生時代編)』 都城市文化財調査報告書第81集。
- 2008 『平田遺跡 A 地点・B 地点・C 地点』 都城市文化財調査報告書第87集。
- 2010 『二本松遺跡』 都城市文化財調査報告書第96集。
- 宮崎県教育委員会 1974 『大萩遺跡(1)』 瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。
- 1985 『浦田遺跡 入料遺跡 堂地西遺跡 平畑遺跡 堂地東遺跡 熊野原遺跡』 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集。
- 1986 『宮崎県文化財調査報告書』 第29集。

- 1988a 『熊野原遺跡 A・B 地区 前原西遺跡 陣ノ内遺跡 前原南遺跡 前原北遺跡 今江城 (仮称) 跡 車坂城西ノ城跡』 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第 4 集。
- 1988b 『水谷原遺跡』 県道日置～高鍋線道路改良事業にともなう埋蔵文化財調査報告書。
- 1989 『宮崎県文化財調査報告書』 第 32 集。
- 1990 『宮崎県文化財調査報告書』 第 33 集。
- 1994 『本地原遺跡』 都市計画街路事業八幡通線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。
- 1995 『学頭・八児遺跡』 県道高岡・郡司分線道路改良事業に伴う発掘調査報告書。
- 宮崎県総合博物館 1988 『下那珂貝塚』 埋蔵文化財調査研究報告 。
- 宮崎県道路公社 1972 『佐土原中溝遺跡調査報告書』。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1997 『広木野遺跡 神殿遺跡 A 地区』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 7 集。
- 1998 『市位遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 10 集。
- 1999a 『鶴野内中水流遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 16 集。
- 1999b 『神殿遺跡 B・C 地区 南平第 3 遺跡 南平第 4 遺跡 中ノ原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 17 集。
- 1999c 『牧の原第 2 遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 19 集。
- 2000 『右葛ヶ迫遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 21 集。
- 2001a 『町屋敷遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 39 集。
- 2001b 『志戸平遺跡 (3 次) 頭田遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 46 集。
- 2002a 『枯木ヶ迫遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 55 集。
- 2002b 『鴉尾遺跡 坂ノ下遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 65 集。
- 2003a 『布平遺跡 古城遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 74 集。
- 2003b 『5ヶ村遺跡 大野原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 75 集。
- 2004a 『西畦原第 1 遺跡 西畦原第 2 遺跡 D 区 (鬼界アカホヤ火山灰層上面)』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 82 集。
- 2004b 『下那珂遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 90 集。
- 2005 『下大五郎遺跡 谷ノ口遺跡 渡り口遺跡 下川原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 113 集。
- 2006 『野門遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 136 集。
- 2007a 『八幡第 2 遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 148 集。
- 2007b 『国光原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 149 集。
- 2007c 『赤坂遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 151 集。
- 2007d 『平田遺跡 D 地点・E 地点』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 160 集。
- 2008a 『諸麦遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 168 集。
- 2008b 『宮ノ東遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 173 集。
- 宮崎市教育委員会 1987a 『源藤遺跡』 宮崎市文化財調査報告書。
- 1987b 『中岡遺跡』 宮崎市文化財調査報告書。
- 1996 『椎屋形第 1 遺跡 椎屋形第 2 遺跡 上の原遺跡』 県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。

- 1997 『車坂・山下遺跡群 車坂第1・2・3遺跡 山下第1・2・3遺跡』宮崎広域都市計画事業車坂・山下土地区画整理事業に伴う遺跡調査報告書。
1999 『下郷遺跡』宮崎市文化財調査報告書第41集。
2000 『黒太郎遺跡』宮崎市文化財調査報告書第45集。
2002 『宮崎小学校遺跡』宮崎市文化財調査報告書第53集。

宮崎大学・宮崎県教育委員会 1984 『宮大農学部平畑遺跡 区』宮崎大学埋蔵文化財調査報告 。

○鹿児島県

- 始良町教育委員会 1980 『萩原遺跡()』始良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。
有明町教育委員会 2003 『長田遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集。
指宿市教育委員会 1992 『橋牟礼川遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集。
1997 『橋牟礼川遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集。
大崎町教育委員会 2005 『下堀遺跡 大崎細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書第5集。
鹿児島県教育委員会 1980 『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書第13集。
1983a 『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第24集。
1983b 『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書第25集。
1984 『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第29集。
1985 『王子遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書第34集。
1989 『一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書()』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第48集。
1990 『一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書()』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第52集。
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993 『東田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第6集。
1996 『東田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第16集。
2003 『上野原遺跡 第2～7地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第52集。
2005 『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第80集。
2006 『中ノ原遺跡 中ノ丸遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第102集。
鹿児島市教育委員会 2002a 『原田久保遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書第35集。
2002b 『武遺跡 E 地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集。
2004 『武遺跡 F 地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書第40集。
鹿児島大学法文学部考古学研究室 1987 『中町馬場遺跡第2次・第3次調査概報』『鹿大考古学会会報』第6号 pp.1-6 鹿児島大学考古学会。
鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1997 『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 平成7年度』11。
2010 『鹿児島大学構内遺跡 郡元団地 D-7・8区 郡元団地 D・E-5区 郡元団地 C-4～6区 郡元団地 C-6区』鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査報告書第5集。
鹿屋市教育委員会 1984 『高付遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集。
2008 『名主原遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書第84集。
金峰町教育委員会 1978 『阿多貝塚』金峰町埋蔵文化財調査報告書第1集。
2003 『鎮守原遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書第16集。
高山町教育委員会 1996 『波見西遺跡』高山町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集。

里村教育委員会 2004 『中町馬場遺跡』里村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集。

東串良町教育委員会 1993 『西牟田遺跡(付唐仁132号墳)』東串良町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集。

菱刈町教育委員会 1983 『前畑遺跡』菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集。

松山町教育委員会 1993 『京ノ峯遺跡』松山町埋蔵文化財発掘調査報告書第7集。

○その他

愛媛県埋蔵文化財調査センター 1991 『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 - -』埋蔵文化財発掘調査報告書第38集。

愛媛大学・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992 『文京遺跡第2・3・5次調査』松山市文化財調査報告書第28集。

愛媛大学埋蔵文化財調査室 2002 『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 - 1997・1998年度 -』愛媛大学埋蔵文化財調査報告。

岡山市教育委員会 2005 『南方(済生会)遺跡 - 木器編 -』。